

「 尽きないよろこび 」

一使徒行伝講解説教 19-

イザヤ書
使徒行伝

56章 3節~7節
8章 26節~40節

説 教 本庄侑子牧師

うまく行っていたのに中断させられてしまった。これからだと思っていたのに、なぜ？教会は2000年間、そのような経験を繰り返してきました。しかしそこにおいて、神様の理由を知らされてきた。それこそが教会の歴史です。

ピリポはガザに下る道に出かけました。直前までいたのはサマリヤです。迫害によって、やむを得ず来た町でした。しかしそこで、ピリポを通して多くの人が洗礼を受けました。いよいよこれからだ、と期待に胸を膨らませたと思います。「しかし」(26節)です。

神様はピリポをガザという荒れ野に遣わされました。なぜ今？なぜ荒れ野に？ピリポには分からなかった。しかし、神様の導きを受け入れました。自分には分からなくても、神様をご存知だからです。そして確かにそこには、神様が備えておられた出会いがあったのです。

神様が出会わせたのは、あるエチオピア人の宦官でした。宦官とは、女王に仕えるため、去勢した人のことです。彼はエチオピアからエルサレムに来ていました。行き帰りで一年以上かかるような大変な旅でした。仕事を中断させて、長旅を決断せずにはいられなくなるほどの切実な思いを抱えていたのかもしれませんが。

ある人は想像します。彼は宦官でした。男性としての機能を犠牲にしてでも、王宮での地位や信頼は手に入れる価値があると思っていたのかもしれませんが。しかしある時、本当にこれで良かったのかと問わざるを得ない出来事が起きたのではないかと。あるいは人生の中間地点に来て周りを見渡すと、皆が享受している家庭を自分は持っていない。子どもを持ちたいと思っても、もう絶対にはかなわない。そう気づいた時、とてつもない虚しさに襲われたのではないかと。

私たちも宦官です。忙しい一週間で生きて、日曜日の朝、眠い目をこすって教会に集う。気が遠くなるような遠い旅です。そしてその旅路において、今いる場所を出ずにはいられなくなる、切実な思いを抱えてきたのです。あの時、ああしていれば、こうはなっていなかったかもしれない。そう叫ばずにはいられなくなる後悔や虚しさを胸に秘めながら旅をしてきました。

やっとの思いでエルサレムにたどり着いた宦官。しかし、エチオピア人は神殿の外の庭にし

か入れません。割礼を受ければユダヤ人とみなされ、中に入ることができました。しかし、彼はそこにも入れません。律法が、去勢をした人がユダヤ人になることを禁じていたからです。

どんなに今から頑張っても、もう遅い。それもこれも、宦官として生きることを決意した、あの日の自分のせいだ。自分自身を呪いたくなくなったかもしれません。そして、そんな彼の様子に気づく人は誰もいませんでした。外から見れば、立派な身なりをした外国人でしかなかった。

しかし、宦官の心を見ている方がおられました。神様です。神様は、過去を呪い、未来を諦めて帰り道について宦官を追いかけて、あらゆる出来事を起こして激しくお働きになりました。彼はその時、イザヤ書を読んでいました。

『主に連なっている異邦人は言うてはならない、「主は必ずわたしをその民から分かたれる」と。宦官もまた言うてはならない、「見よ、わたしは枯れ木だ」と。』(イザヤ書56章3節)

はっとさせられたことでしょうか。残された人生、枯れ木のように、ただ枯れていくしかない。そう思い込んでいた自分の前に現れ、「そうではない！」と叫んでくる声が聞こえてきたからです。無我夢中で読み進めたことでしょうか。

宦官の目はイザヤ書53章にとまりました。そんな時、ピリポがやって来ました。宦官は尋ねます。「この彼という人は誰ですか」。ピリポはこの聖句から説教をしました。これはイエス・キリストのことだ、と。

主イエスを通してあなたの罪は赦された。今や、過去も未来も輝いている。手遅れだと思った過去にもキリストの復活の光が照らされた。あなたの人生全体が、終わりの日に神様の栄光が現されるための、意味あるものにされている。

宦官は洗礼を受けました。主の霊がピリポを連れ去った後も、宦官は喜びながら旅を続けました。主イエスが共にいて、この旅路を神様の栄光を現すためのものとしてくださる。そう知って、残る人生を全て神様に委ねて、未来に向かって歩いていきました。

私たちが招かれたのも、この旅路です。どのような道に導かれようとも、この旅路には神様の栄光が照り輝いています。

(記 本庄侑子)